



Title	神戸市北須磨の児童虐殺事件をめぐる発言
Author(s)	鷺田, 清一
Citation	臨床哲学ニューズレター. 1998, 2, p. 85-95
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/81747
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

神戸市北須磨の児童虐殺事件をめぐる発言

鷺田清一

行き場を失った残酷さ ————— 透明なボク／神戸小6殺害事件を問う

何か見えてくることがあるかもしれないと思って、土師淳君殺害事件現場の団地を歩き回ってきました。中学校の校門は予想と違ってました。校門の前にはかなり広い道路があるけれど、傾斜があって道路の向こう側はがけ。どう考えても、首を見せる対象は学校の外ではない。首を置いた人間の意識は学校の中に向いている。

●いじめの極大版

タンク山にも登ってみました。団地が一望できるんです。そこは四方を山や丘にかこまれた盆地のような空間。被害者の家も、殺害現場も、首が置かれた中学校も、すべて歩いて行ける。平均より上のクラスの家が整然と立ち並んでいるけど、かなり一元化された生活スタイルの団地。こういう街で下へ排除されたら、敗者復活戦はないなあ。それは皮膚感覚としてリアルだった。

無意味な場所がないと言ったらいいんでしょうか。都会だったら影の部分がいっぱいあって、ひとつ間違えると犯罪になりそうなこともあるけれど、結構隠れる場所がある。それが見あたらない。ゲーセンもコンビニも。放課後、みんなどこでたむろするんだろうと思った。

逆にタンク山というのは、唯一だれも意味を与えていない場所だったのかもしれない。水道のタンクとテレビアンテナがあるだけ。その点で、ここは意味の陥没地帯だったのでしょう。

この事件にはいじめの極大版というか、最終形態みたいなところがあって、ヒヤッとさせられます。

人間が一番必要としているのは、自分がだれかの無視できない他人でありえている、という実感です。愛されなくてもいい、憎まれてもいい。憎まれるという形ででもいつも人に意識されているなら。いじめっ子にはそういう思いがある。それがなくなるとつらい。そういう時僕らは往々にして、妄想の中で、自分を無視しない他人を作ってしまうわけですね。

ひょっとしたらこの事件では、それは学校とか世間だったのかもしれない。具体的な中学校ではなくて、むしろ学校システム、社会そのもの。おれはここにいる、何で意識しないんだと。首の置き方や犯行声明からはそんなこと感じます。

●「食」でも攻撃性

今の時代の残酷さの行き場ってどこなんやろ……。歩きながら気になったことのひとつはそれです。容疑者自身の過剰な残酷さについては、家族関係がわからなければ憶測でしかものはいえない。

だけど、残酷さというのは子どもだから少ないのではなくて、子どもの方がむしろ倒錯的なことをする。僕らの子ども時代は、石を投げあってけがさせたりとか、亀をブロック塀にぶつけて甲羅の中を見たりとか、そういうことがいくらかでもあった。どんな文化もみな、動物を生けにえにするような残酷な儀礼を、あるいはお祭りとか通過儀礼とかカーニバルといった、秩序を象徴的にゆさぶる装置を、ひとつの知恵としてしつらえてきた。

社会の近代化は、生死にかかわることをシステムチックに隠します。また、家の中の仕事も、汚物処理から料理に至るまで外部化してきた。料理は、おのれの手で生き物をあやめることですから、残酷な経験です。近いことは、ままごとでもやる。魚殺したら心臓が三十分生きてたとかね。そういうことがなくなって、僕らの中の残虐性を放流する所がほんとに限られてきた。

今の日本では、厳然たる事実として、メディアの中に残酷さを放流している。すぐ禁止になったけれど、いかに首尾よく人をひき殺すかを競うテレビゲームだとか。「たまごっち」だって、高校生ではやってたのは、いかに早く殺すか。ストレスを与えて、世話はしない、メシは食わせない、夜は起こす。でも、残酷さを放流させるのに、メディアというのは中途半端なんです。放流させはするけど、完全な放出には至らない。だから、残った「おり」が本人も知らない間にたまって事件を誘発する、という可能性はある。

そういう残酷さや攻撃性は、暴力とは直接関係のなさそうな媒体を使って現れることもある。ひとつは「食」。拒食にしろ過食にしろ、ある意味では自分自身への攻撃でしょ。ピアスと同じだね。

セックスだってそう。食と同じように性にも過敏になって、とりあえず早くやりすごしたい、と思う女の子が増えている。快楽が負担になっているというか、傷つukのいがやなんですね。その傷つきやすさが攻撃性に反転することがある。「むか

つく」というつぶやきは、攻撃というよりも守りの言葉じゃないですか。

●想像力も変わる

最近の学生には、わからないものは触れようとしないところがあるみたい。わかるとこで処理する。これはかつては「いい子」の感受性だったんだけど、「悪い子」まで同じになってきている。いやなものは受け付けない、わからないものは知らんぷりする。ニュアンスがないんです。想像力のあり方が変わり、残酷さの水路がとても狭くなってしまっているんじゃないでしょうか。

群れに危険が迫ると、ひとは群れの内側にどんどん入っていく。それが臨界点を超えると、いっぺんに攻撃に出る。今どきの集団生活を見てると、ふとそんなふうに感じる瞬間が、あります。

(1997年7月8日付『朝日新聞』夕刊のインタビューから
聞き手・構成：村山正司記者)

息つまる“快適な街” ————— 神戸少年事件と戦後

こんどの事件では、多くの人が不安を抱き、ヒヤリとした感覚に襲われた。なぜか。犯行の残虐さもあるが、それ以上に自分の周りで同じようなことが起きても不思議ではない、そんな感じを受けた。だから、衝撃が大きかった。私が関心を持つのは人々のこうした反応です。

事件を振り返ると、逮捕されたのは14歳の中学生、舞台はニュータウン。私はここで二つのことを考えました。教育のあり方と、街づくりというか都市設計の問題です。戦後、少しでも住みやすくと思って築いてきた街、家庭、学校が果たしてこれで良かったのか。そのことが痛切に問い掛けられているように思います。

そう考えたとき、まず検証しなくてはならないのが、子どもが大人になる際にぐり抜ける「成人儀礼」と、地域を含めた教育のありようです。昔はこの時期に、大人が大変な関心をもって積極的に介入した。思春期は非常に不安定だし、物騒できわどい時期だからです。逆に、普段は今みたいに子どもにいちいち構わなかった。

昆虫のチョウに例えるとよく分かる。チョウは青虫から変身するが、その間にサナギという時期がある。ちょうど思春期と考えればいい。サナギは木の葉などで体を嚴重に守っている。青虫の状態を破壊、解体して一種の熔融状態にあるから、不安定そのもの。で、ガードを固くする。人間も同じなんです。ところが、私たちはかつての地域社会が持っていた成人儀礼、通過儀礼をコミュニティの崩壊とともに、学校に肩代わりさせてしまった。しかし、学校での「通過儀礼」は小学校から高校まで、延々と続く。20歳で迎える成人式は形式だけのものになっている。学校では偏差値という一元的な価値観で、子どもをダイコンのように輪切りにし、生きていくうえで欠かせない根源的なルールや作法は、ほとんど教えていない。子どもは常に監視され、息が詰まる。成人儀礼として、うまく機能していないわけです。

だから、思春期の子どもたちはうちなる世界にこもって、たった一人で自分のための成人儀礼をする。ピアスや茶髪はそれだ、と思うんですね。

じゃあ、私たちはどうしたらいいのか。望ましいのは学校と地域、家庭が役割を分担することです。隣近所など身近なところで社会のルールを教え、学校は勉強を受け持つ。でも、家庭はその実質がいろんなところで崩れ出しているし、街にはかつてのような濃密な地域社会は存在しない。ともに足腰が弱っていて、思春期の子どもを引受けることは難しい。出来ない相談です。

となると、残るのは学校。教育のスタンスを変え、学校を変えていかねばならない。教育機会の多元化や教育期間の短縮、学年制のあり方などを、具体的に踏み込んで議論し直す必要があるんじゃないか。

今の学年制は同じ年の子どもを集めてクラス編成している。でも、本当にそれでいいのだろうか。子どもにとって大事なのは親と同時に友人だが、今は友達がみんな同年齢。これはおかしい。

今回の事件をきっかけに私たちは、教育と学校の根本的な改革を考えなくては行けない。そうすれば、成人儀礼ももっと多様になり、子どもたちも息をつけるようになるはずだ。

次に都市の問題。戦後、私たちが快適な住環境として造り上げてきたのがニュータウンですが、ここには欠けているものが三つあった。宗教施設と古い大木、そして街中の闇、つまり一種のいかわしさを持った盛り場のような“陥没地帯”なんですね。

これらは都市という社会から外をのぞく風穴というか、窓の役目を果たしている。その街に居場所がないと思う人間が、外の世界を感じ、「まだ生きていける」とい

その街に居場所がないと思う人間が、外の世界を感じ、「まだ生きていける」という気分に辛うじてなり得る場所なんです。別の価値を信じるとか、一目につきずガス抜きをすとかね。

ところが、ニュータウンでは宗教施設は“敬遠”され、無意味なもの、いかがわしくて悪の温床になりそうなものは排除されてきた。戦後の都市設計は、図面を眺めて、学校や百貨店、コンサートホールなどを分配する。よかれと思う、意味のある名詞を「主語」にして街を造った。それが快適で、安全で、住みやすい街だと考えたんです。だから、いかがわしい場所が入り込む余地は全くなかった。

本当の意味で人間が住む街はそうじゃない。明るいところもあれば、薄暗い場所もある。あるところでは時間が規則的に流れ、ある場所ではよどんでいる。ヒヤッとしたり、なごんだり、皮膚感覚のある「述語」で作られた、いろんな場所があり、いろんな時間がある。さまざまな次元や時間の混在が都市の分厚さをつくるんです。

今回の事件はコンビニもゲームセンターも喫茶店もない、そんな「安全設計」の街のあり方に疑問符を付けた。大人も子どもも行き詰まったり、落ちこぼれたときの“逃げ場”がない。安全で美しい街だが、生きにくい。なにしろ、くつろいんだり隠れたり出来る「吹きだまり」が身近にないわけですから。

そう考えると、私たちが住みよい街、つまりそれが「アメニティー（快適性）」だと思い込んできたものは、実は間違いではなかったのか。都市設計、都市デザインの思想、原則も根本から見直しを迫られているのではないか。

これも事件が突きつけた大きな課題だと思います。

（1997年11月3日付『毎日新聞』朝刊のインタビューから
聞き手・構成：中島信一論説委員）

事件が映す不安

————— 十四歳の中学生が起こした事件にたいする大人たちの反応

神戸の北須磨ニュータウンの事件は、容疑者として中学生が逮捕されたことで、報道もすさまじく過熱した。わたし自身も二、三の新聞に意見をもちめられたし、

夜は夜で会合があるとかならず、この事件が話題になった。みんな、事件の細部や周辺事情を驚くほどよく知っている。一般紙からスポーツ新聞まで、ワイドショーからインターネットまで、この関心の高さは異様なほどである。

こんどの事件では、みんなよくしゃべるわりには、どこことなく気が重そうだ。覗き見趣味的に語るひとでさえ、どこか心に引っかかるものがあるようだ。ひょっとしてうちの子もそれに近い心理状態にいるのではないか、あるいは、この町で起こっても不思議はないかもしれない……。そんな漠然とした不安である。

労金を中心に町づくりがなされ、自治活動の活発なタウンで、住民の多くが大企業の恵まれた社員であり、裕福で、表面的には階層的にも差がなく、悪所も遊興施設もない、一見理想的な住環境のなかでこうした事件が起こったという事実、ふと考え込んでしまったひと、この新聞の読者には少なからずおられるのではないかと思う。

だが、子どものこと、町のこと、さることながら、ほんとうのところは、じぶんのなかにこそ漠とした不安の原因を抱え込んでいるということはないか。少年は奇しくもじぶんを「透明な存在」と規定した。町にも、学校にも、家庭にも居場所がないという思い、この感覚を、ひょっとしてふつうのおとながどこか奥深くにしまいこんでいるということはないだろうか。家族、学校、会社……こうした共同生活という場のありかたそのものが、なにかとても閉塞的な状況にきていることのサインを、この事件に象徴的に読み込んだひとが意外に多いのではないかと思うのだ。

クローン羊が話題になったときに、次はクローン人間かと、アメリカ社会は、大統領をはじめ即座に政治的に対応し、世界を驚かせた。これにしても、学界からとくに退場したはずのDNA決定論という神話が、一種の宗教的アイコンとしてアメリカ社会に突如、再浮上したのだと解釈する論者がいる。米国は価値と文化の多様性を積極的に認めることを国民統合の精神としてきたが、寛容は同時に忍耐を含むものであり、そういう、忍耐と思ってはいけない忍耐にともなうフラストレーションが、社会のなかで澱のように溜まってきて、そういう価値相対性の社会にたいして、ひとびとのうちに潜むある共通感情が抑制を欠いたまま、DNAの普遍性神話に飛びつくかたちで露出したというのである。

視線を国内に向けて、女子高生の風俗をさかんに問題にするジャーナリズム、歴史教科書の記述の問題を声高に論ずるひとたち、このひとたちがこんなに「熱く」なるのはなぜなのか、そしてなぜ少なからぬひとたちがこうした言動をささえるのか。そこに潜んでいるはずの深い不安と、攻撃的な言動へのその反転をどうとらえ

るか、それがわたしなどには、報道される事実と同じくらいに気にかかる。この反転の構造は、酒鬼薔薇と名のる十四歳の中学生の衝動とひょっとして同質のメカニズムで動いているのではないかと。

さて、登校拒否児童の甥っこの世話を一時期していた友人に久しぶりに会ったとき、かれがふと、こんな感想をもらした。こんどの事件は日本中の家庭でちょっとしたガス抜きになっただろうな、と言うのである。多くの家庭で夕食のとき、テレビを見ながら子どもたちが、「もしぼくがこんなことしたら、おかあちゃん、どうする？」と親に訊いたにちがいない。親を試したのである。友人の甥のばあい、どんな答えが母親の口から返ってきたのかは知らないが、返事を聞いた子どもは「ふーん」とだけ言って、また別の皿に箸をのばしたそうだと。子どもの側からのこの試しが、束の間、親子のあいだの渠にたまった澱をさっと流しただろうというのである。

逆に、意識ががちがちになって、この話題にだけはふれられない家庭も、もちろん多くあっただろう。でも、親子がたがいに同じことを気にし、なんとなく言葉がぎこちなくなっているという意識だけは、共有したにちがいない。友人が言った「ガス抜き」とはたぶんそういうことなのだろうと思う。

（『社会新報』1997年9月3日号）

「おとな」の事件

神戸の児童殺害事件をめぐる実によく多くのことが語られてきたが、論じても論じて、容疑者の子どもの像も、被害者の子どもの像も、どこかはっきりしない。それはこの事件が「おとな」の事件だからではないか。論評の渦のなかでそんなふうになるようになった。

教育の反省と改革、都市設計の精神の見直し、この事件とともにこうしたことが求められているように、人びとは感じだしている。戦後、わたしたちが幸福を望み、そのためによいと思ってやってきたことの全体が問われている、と。

環境にやさしい、地球にやさしい……そんな「やさしさ」という言葉のインフレーションが、やさしさをすり減らせる。市民の自由、都市の安全、非行の防止のた

めによかれと思って積み上げてきたことが、「よい」ことばかりであるがゆえに、もっとも「よくない」を生み出すことになった。そういう事実を、よく考えてみる必要があるように思う。もちろん「おとな」が、である。「やさしさ」と声を大にして言える、みずからの意識の粗さ、意識の不感症を、である。

リセット・ボタンを押せば、保育がもう一度、一からやりなおせる。うまくいかなかったら、もう一度スタートからやりなおせばいいのだ。そういうリセット感覚を憂う声が少なからずある。あるいは、ファミコンのゲームに夢中になっているうちに、現実世界と仮想世界の区別がうまくつかなくなる……そういうふうにして現実の輪郭が不明確になることを憂う声もまた少なからずある。

しかし、どうなのか。命を産むという男と女の「自然な」過程が、ほんとうは自然ではなく、破綻しもすれば解消もやりなおしもできる操作可能な過程であることを情報として日常的に垂れ流しているのは、「おとな」のほうではないのか。避妊や中絶、離婚や不倫、こういった言葉がテレビから聞こえてこない日はない。そういう人生のリセットを自分たちがたえずしながら、他方でたまごっちにリセットボタンがついているからといって、命のリセット感覚を憂うという、この偽善を見てもしまったら、言葉のあまりの軽さに啞然として、以後どんな言葉も本気では口にしなくなるほうが自然というものだ。

ファミコンと戯れているうちに、リアルな感覚が揺らいできている……。それこそ現実感覚の凡庸な「おとな」が言いそうな言葉だ。しかし、たとえばゲーセンにたむろする少年たちには、ゲームで疑似的にカタルシスを得るくらいしか、暇つぶし、うき晴らしの手段がない、ただそれだけのことではないのか。彼らはリアルとヴァーチャルを混同するほど非常識ではない。そんな混同をしていては一日たりとも生きてはゆけない。

「援助交際」している少女はそれがかんたんに金になることを知っているからする。少女たちも、少女を買ったりパチンコで稼いだりする「おとな」の男たち、女たちと同じリアルな感覚をもっている、それだけのことだ。目的と手段とクールに区別する、そんな彼女たちのあまりに現実的な感覚におとながとまどっているだけのことだ。官僚の贈収賄や証券不祥事から「結婚生活」まで、おとなの世界は基本的に「援助交際」の世界だ。彼女たちがそういう論理を見事に丸写ししているからこそ、「おとな」たちは苛立つのではないのか。何度も整形手術をして逃亡していた殺人犯の女性について、懸賞金つきで情報を募集したらとたんに情報提供が増え、しかも犯人逮捕後に（聞くところによれば）すざまじい数の報酬要求が届けられた

という。「金がもらえるのなら」というあさましい理屈は、「おとな」の援助交際の世界の普通の理屈だ。

自分がとうの昔に失った夢を子どもに押しつけたうえで、その夢にかなっていないと子どもの「変容」を憂う、そういうおしゃべりはそろそろやめにしたほうがいい。

「よい」ことの集積、「安全措置」の集積のなかで、こんどの事件は起こった。このことに多くのひとが衝撃を受けた。自分たちの嘘を突きつけられたことを不快に思った。

子どもを放っておけば、残酷なこともたっぷりするだろう。「おとな」とまったく同じように。虫の脚を引き抜いて遊ぶこともある。川でとってきた亀を、中が見たいと、幼女が壁にぶつけて潰すのを見たこともある。そういうことはたしかにする。が、したあと、なんか気分がよくない。そのいやな気分が、次にもう同じことをさせなくする。

それを「命の大切さ」とか「地球にやさしい」といったふうに、上すべりの言葉で言ってしまうことで、そしてそれがだれも何も考えずにかんたんに漏らす流行語になることによって、命は軽くなる。やさしさが消える。それと比べれば、じぶんの食用のために他の命をあやめていること、そしてその作業を他人に委ね、さらにそのことをも見えないようにしたうえで、「命の重さ」「やさしさの必要」を口にしているそういう人間の矛盾、そういう身勝手をそのまま見せることのほうが、隠すことよりはるかに教育的なことではないだろうか。もっと「思慮」のある言葉、もっと悲しみに浸された言葉とともに。

家で飼っていた鶏の頭をおとなたちが今夜の食事のためにはねるのを目撃したからと言って、あるいは多くの子どもがポケットにナイフをしのばせているからと言って、それがそのまま殺人に結びつくわけではないことは、いまの中学生の親たちは思い出として知っているはずだ。その抑制が効かなくなりだしていることの意味をこそ、「おとな」は考えるべきである。その意味で、神戸の事件は「おとな」の事件である。教育を設定したのは「おとな」なのであるから、教育の問題化はそのまま「おとな」の問題化である。今後どんな教育が必要かを考えるより、いまどんな教育をやめるかを考えたほうがいいと思う。

(『週刊金曜日』No. 197)

「リアル」の変容

神戸の少年殺人事件をめぐるさまざまな報道のなかで、現実と非現実の錯綜という事態が残虐な殺人行為への引き金となった、という「解釈」がしばしば目についた。ホラー・ビデオのヴァーチャルな映像をくりかえし見ているうちに、現実と擬似的な現実との区別がうまくつかなくなったというのである。

「ヴァーチャル・リアリティ」という言葉が、テクニカルな情報としてよりも、イメージ言語として独り歩きするようになって、その社会的影響を心配するややヒステリックな声が、実際の技術的な可能性とは別の場所で生まれだしていることは、半年前の「クローン人間」への応用を危ぶむ声と似ている。

しかし、いまの十代のひとたちというのは、ほんとうにファミコンやビデオのなかの仮想的な出来事と、実際に身のまわりで起こっていることを混同するほど、感覚が混乱しているのだろうか。ゲーセンにたむろする少年たちはゲームでカタルシスを得られると信じているだろうか。「援助交際」をやっている女子高校生の証言を読んだりしても、むしろ金稼ぎの目的と手段が切り離されていて、区別があまりに軽くしっかりとつけられていることのほうが不気味だ。その意味では、彼（女）らの世間認識はむしろ「現実的すぎる」と言いたいくらいである。

リアルということの感触が変わってきているのではないかと思う。

なだいなださんがテレビで語っておられたそうだが、いまの子どもたちの親の世代までは、親よりも子どものほうが学歴が高くなるというのはあたりまえのことだった。子どもは親の世代を乗り越えた。社会技術も、賃金や小遣いも、食べ物も、住宅も、みな改善された。社会は確実に「進歩」と「繁栄」の方向にむいていた。そのことをひとは身体で実感した。

それがいまの世代は親の生活条件や学歴を乗り越えるということは考えにくい。この不況下でその感じはより「リアル」になっている。が、親は「成果」を求める。おまえは何をしたのか、と。親が体験しなかったものを見いだすのは、この時代そうかんたんなことではないから、視線は内向する。「私探し」という言葉や「わたしって何？」という問いの流行には、おそらくこういう面があると思う。

親たちの世代に参入しても「先が見えてる」という気分は、時間の感覚にも現われるのか、「ずっとこのまま」というのが流行語になっているとも聞く。

ほんの一例でしかないが、こうしたリアリティの変容について認めざるをえなか

ったのは、つい先日、福井で時効ぎりぎりのところを逮捕された中年女性の報道に接したときだ。逃亡中に整形美容で顔を七、八回変えたという女性の殺人容疑者の逮捕は、神戸の事件とはずいぶん印象が違った。なにか切ないほど「縮まって」見えた。殺害の動機が「嫉妬」というのは、少年の事件に比べてうんとわかりやすい。逃亡中に売春らしきことで金も稼いでいたというが、報道された額を聞いて、女子高校生の「援助交際」のほうがはるかに値が高い。殺し方の残虐さにおいて中学生のほうがはるかに凄まじい……というふうに、中年女性のイメージの輪郭は、いまのミドルティーンの行動イメージのなかに小さく、すっぽりおさまってしまうという怖さがここにはある。ふつうの十代のひとたちの行動のほうが、殺人犯の行動よりも、観念としては広がっている。

懸賞金がかかると情報が一気に増える。それも容疑者の逮捕後、情報提供への報酬を要求する声は何百と届けられたと聞いて、容疑者ではなく情報提供者のほうを「あさましく」思ったひと多かつたはずだ。「援助交際」をする女子高校生は、「金が出るんだったら……」というこういう大人たちの正確な映し鏡になっている。次から次へと明るみになる金融界の日常的な贈収賄行為から懸賞金騒動まで、まるで「援助交際」天国だ。

仮想現実を現実から切り離れたうえで、外部から、その混同を危惧するのはよしなほうがいい。現実じたいが仮想的なものをいっぱいに含み込んでなりたっている。恋愛も、政治抗争も、言葉が構築した文学やジャーナリズムの世界も、仮想的なものがむしろその神経をなしているのではないだろうか。だから、たとえば「少年」たちを論じる大人たちは、少年たちにおける現実と仮想現実の「混同」を憂慮する前に、自分たちの現実感の特殊さのほうにまず眼を向けるべきだ。自分たちの現実感の枠を一度外して、子どもの世代が抱え込んでいるらしいリアリティの深い変容のほうに、濃やかな眼を向けるべきだと思う。

(『IBM User』No. 425)